

全

A
DEDICATED
LIFE

身

出演
井上光晴
壺谷雄高
瀬戸内寂聴
野間 宏

小

監督
原 一男

説

1994年
疾走プロダクション製作
カラー 2時間37分
配給
疾走プロダクション
ユーロスペース

家

嘘

も

っ

き

終

わ

り

ま

し

た

の

で

...

、

じ

あ

や

あ

『ゆきゆきて、神軍』から7年。原一男監督が井上光晴の虚構と真実に肉迫――



A DEDICATED LIFE 全身小説家

東京国際映画祭・ロカルノ映画祭正式招待作品

出演 井上光晴 塩谷雄高 瀬戸内寂聴 野間 宏 文学伝習所の人々ほか

監督・撮影 原 一男 製作 小林佐智子

1994年 疾走プロダクション製作 カラー 35mm・スタンダード モノラル 2時間37分 配給 疾走プロダクション+ユーロスペース

小説家が愛しい人になるまで

佐藤友紀

❖対象が何であれ「カワイい！」のひとことで片付けてしまう若い娘の言語感覚が、ひと頃かなり批判されたものである。だが世の中には思わず「カワイい！」と呟かせてしまう人間もやはり存在するのだ。驚嘆、畏怖の念、尊敬、そして自分でも説明のつかない懐しさなどあらゆる感情がないまぜになって、映画を見る前は單なる戦後を代表する「偉い作家」だった井上光晴が、かけがえのない愛しい人に変わっていくように。

❖この心の変化は、いったい何なのだろう!? たえば映画が始まってわずか数十分間しか経っていないのに、肝臓ガンの手術後、初めて自宅に帰った井上が「これこれ、これが食べたかったんだ!」とハフハフとゆであげのうどんを食べる場面では、「ゆつくり、よくかんで食べて」とスクリーンに向かってつい余計なお節介を焼き、伝習所の生徒を怒鳴る場面では、自分が怒鳴られたかの如く身をすくめる。病気の進行とともに刻々とやせ細っていく井上の身を案じることも含め、いつしか映画の受け手であった私たちまでもが、全身小説家の生と積極的に関わっていくのだ。

❖正確に言えば、作品としての『全身小説家』自体はすでに完成しているのだから、観客である私たちが今さら何かを変えられるわけではないのだが、それでも明らかにこの映画、そして井上光晴という人間との距離感、関係は以前と同じではない。

❖それにしても、とんでもない人間がいたものだ! 原一男監督が、井上のこのとんでもなさで最初から気づいていたとしたらもう「おそれ

りました」と言うより他はないが、こちらの勝手な思い込みながら、井上をめぐる人々にカメラを向ける原監督自身が「あらあら」とズツつけている様子が目に浮かぶ。

❖初恋の人をめぐる話、父を初めとする家族の話、霊媒師としてけつこう流行っていた話……etc. 幸福な結婚生活をおくっていたにもかかわらず、井上によつていつの間にか遊廓に売られてしまった「崔ちゃん」ご本人としたらまたたものではなにかもしれないが、ドキュメンタリーフィルムに挿入されたフィクション場面の美しさを見たら、きつと納得してくれるに違いない。それに次々に明らかになる「うそつきミツチャン」の嘘は、証言者たちがほとんど笑いつけている様子でもわかるように、もう芸術の域に達しているのではない。特に炭鉱の爆発事故で亡くなった人間の霊を呼んだと称する時の、井上の思いやりなどは、人の気持ちの何なるかを知らず者にか考えつかないものだ。

❖そう! ミツチャンの嘘がたまたま嘘でないのは、自分に関わる人々の気持ちを無視して一方的に発し続けたものではないからだ。たとえなくてもなく荒唐無稽ではあつても、そこには必ず鋭い人間観察とファンタジーやペーソスに姿を変えた優しさが加味されている。彼と関わりがあったという女性たちの証言と表情はいずれも興味深い、中でも一番印象的だったのは、彼に耳の形の美しさを瞬時に認めてもらつたという老婦人の話だ。実の母親と井上光晴だけが指摘してくれたは言葉、カメラの前で大事な宝物のように披露する彼女の、何と

幸福をうなごとだろ。女性に対するこの「眼差し」があつたからこそ、女たちも慈しみの情を持たずにはいられなくなるのだ。

❖古今東西、小説家を含む芸術家は、その作品のみで語られるべきだという考え方が主だった。確かにそれも一理ある。が『全身小説家』のような映画を見てしまうと、そうした観念的な物言いが何とも味気ない台詞に聞こえてくる。カメラの前に文字通りはらわたまでさらけ出しながら、本音のいくつかは持ち去ってしまったミツチャン。それにさまざまな思いをはせるのも、この映画に出会ってしまった者の特権かもしれない。

かいつ

❖戦後社会を根源的に問い、差別を告発し続けた作家・井上光晴は平成4年5月30日、ガン性腹膜炎のため死去した。彼の死をもつて、戦後文学の終焉と見なす評論家は多い。映画『全身小説家』は、『ゆきゆきて、神軍』で圧倒的な衝撃を与えた原一男監督が、5年もの歳月をかけて一人の作家の(人生)を撮り続けた渾身の一作である。

❖作家・井上光晴に向けられたカメラは一人の作家の軌跡をとらえるとともに、彼の虚構もあぶり出す。瀬戸内寂聴、塩谷雄高ら文壇の友によつて明らかにされる真実、自作年譜の嘘、母親と初恋の少女の隠された真実、女性たちによつて語られる虚々実々の素顔。映画は虚構と真実の迷宮へと観る者を誘い込む。

9月公開!

特別鑑賞券1500円絶賛発売中

(当日一般1800円/学生1500円/小人・シニア1200円)

当劇場窓口および都内各プレイガイド、チケットぴあ、チケット・セゾンにてお求めください。

●上映時間

連日 10:40 1:40 4:40 7:40

ユーロスペース2 ☎03(3461)0211

渋谷駅南口下車2分 JTB前さくら通り上る

●ユーロスペース1にて原一男監督作品特集決定!(8/19まで「ゆきゆきて、神軍」 8/20~8/26「さようならCP」『極私的エロス・恋歌1974』)